



めずらしい昆虫たち

イシガケチョウ



初夏～秋、前ばねの長さ26～36mm。中型。南方系で、以前は本州では紀伊半島の南の端(はし)と四国・九州・南西諸島にすむチョウでしたが、最近はすむ地域がかなり広がっています。名前ははねが石の崖(がけ)の模様(もよう)になっているからです。

メスグロヒョウモン



初夏～秋、前ばねの長さ30～40mm。ヒョウモンチョウとしては大型。オス・メスでははねの色が違います。写真はメス。メスのはねの色が黒っぽいので、メスグロの名前になっています。しかしオスのはねは、ヒョウモンチョウに多いオレンジ色に黒点(こくてん)のある模様(もよう)です。

奈良県では希少種に指定されています。

ヒオドシチョウ



前ばねの長さ32～42mm。初夏に羽化(うか＝成虫になること)し、成虫で越冬して春まで生きます。真夏には夏眠(かみん)しますので、7月以降は姿をほとんど見られません。幼虫はエノキの葉を食べて育ちます。はねの色を「緋緘鎧(ひおどしよろい)」に見立てた名前です。

ウラギンヒョウモン



初夏～秋、前ばねの長さ27～36mm。中型。名前についている「ウラギン」は、後ばねのうらが銀色に見えることからです。

奈良県では希少種に指定されていて、ならやまで見かけることは多くありません。



「緋緘鎧」とは、胴部を守る鎧(よろい)で、鉄や革の小板を濃い赤の絹糸でつづって作られています。戦闘の時に武士が身につける日本の伝統的な防具です。

ゴイシシジミ



初夏～秋、前ばねの長さ10～17mm。小型。すむ場所はササ類の生えているところですが限られています。幼虫は肉食性で、タケやササにつくアブラムシを食べます。名前についている「ゴイシ」は、はねの模様(もよう)が碁石(ごいし)に似ているからです。

奈良県では希少種に指定されています。

ウラナミアカシジミ



前ばねの長さ16～22mm。初夏だけ雑木林(ぞうきばやし)に現れるチョウです。日中は林のへりなどで休んでいて、夕方になると活発に飛び回ります。

奈良県では絶滅危惧種(ぜつめつきぐしゅ)に指定されています。

絶滅危惧種とは、まったくいなくなってしまうおそれのある生物のことです。

エゾヨツメ



前ばねの長さ60～100mm。4～5月ごろに発生するヤマムユガ科の大型のガです。北海道では平地、本州では山地にすむガで、ならやまのような里山で見つかるのはめずらしいです。

ウスタビガ



前ばねの長さ60～110mm。晩秋～初冬に現れるヤマムユガ科の大型のガです。まゆは黄緑色のふしぎな形で、木の葉が落ちつくした冬の雑木林でよく見かけます。ただし、羽化(うか=P40で説明)後のものです。水をすくう柄杓(ひしゃく)に少し似ているので、ヤマビシヤク(山柄杓)などの名があります。



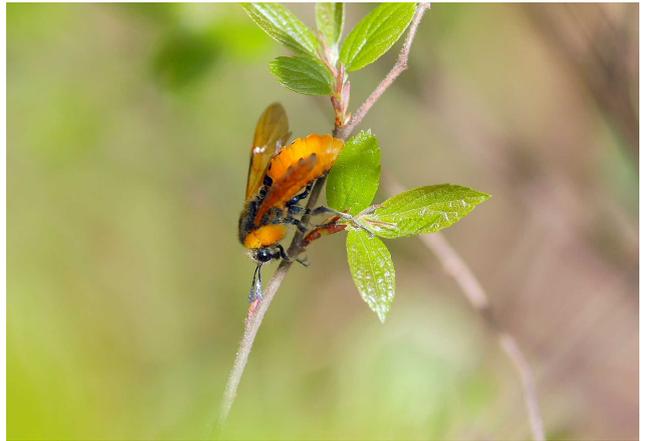
「脱皮」とは、自分の体が成長していくときに、その外皮がまとまって剥(は)がれることで、目的は体を成長させるためです。脱皮するには、体力をたくさん使います。

シロシタホタルガ



6～7月、はねをひろげると50～55mm。小型のガです。よく見かけるホタルガによく似ています。ホタルガは、はねの白い部分がV字形になっていますが、シロシタホタルガは一文字です。ならやまでは少ないです。

ホシアシブトハバチ



4～5月、体長は約18mm。ハチとしては中型です。スズメバチに似せる擬態(ぎたい)をしていますといわれています。幼虫はガの幼虫のような姿で、エノキの葉を食べて育ちます。



「擬態」して身を守る昆虫には、小枝に似せた尺取虫やナナフシ、枯葉に似せたアケビコノハ(ガ)などの昆虫にその例が多いです。ショウリョウバッタは、イネ科の植物の葉に似せています。ゴミや死骸、鳥の糞、警戒色(生き物の目立つ姿)、植物の刺(とげ)などに擬態するのもいます。

ルリモンハナバチ



5月～9月、体長は13～14mm。小型のハナバチです。たいへん美しいハチで、花にきます。ハナバチ類で体の色が青系のものはめずらしいです。幼虫はコシボソハナバチ類に寄生(きせい)して育ちます。この場合の寄生というのは、親バチがコシボソハナバチ類の巣に産卵し、ふ化した幼虫が、コシボソハナバチ類のハチの世話を受けて育つことです。

トモンハナバチ



夏～秋、体長は14～18mm。小型のハチです。メスの体には、黄色の紋(もん)が10個ありますので「十紋」(ともん)という名がついています。オスには12個あります。めずらしいハチです。



オオセイボウ



初夏～秋、体長は13～19mm。中型のハチ。全身が金青色にかがやき、たいへん美しいハチです。花にきます。幼虫はスズバチやトックリバチなどの巣に寄生(きせい)して育ちます。

セイボウの名前は、漢字では青蜂(せいほう)と書くことからです。寄生については、ルリモンハナバチの例(れい)と同じです。

チビクワガタ



5月～9月、体長は10～16mm。クワガタムシとしては最小級です。オスとメスはほぼ同形なので、見分けにくいです。広葉樹の朽ち木の樹皮(じゅひ)の下や木の洞(ほら)にすみます。昆虫の幼虫などを食べる肉食性(にくしょくせい)で、クワガタムシ類としてはめずらしいです。年中いるようですが、朽ち木などから出てくるのは5月～9月ごろのようです。

ハラグロオオテントウ



ならやまでは5月初旬のごく短期間、現れます。体長は約12mmですが、円形なのでたいへん大きく見え、日本産のテントウムシ類では最大級です。幼虫・成虫ともにクワの木につくキジラミなどを食べます。名前は腹部が黒いことによります。

クビアカモモフトホソカミキリ



4～5月、体長は9～11mm。小型。このカミキリムシは、わが国でメスだけしか発見されていません。めずらしくメスだけで繁殖(はんしょく)する単為生殖(たんいせいしょく)するようです。すむ地域は限られています。名前は体の特徴(とくちょう)をすべてあらわしています。

首は赤く、腿(もも)は太く、体は細いカミキリムシというわけです。



クロカタビロオサムシ



4月～11月、体長は22～31mm。大型のオサムシで、独特(どくとく)の形をしています。オサムシ類の大部分は、後ばねが退化(たいか=この場合はなくなる)して飛べなくなっていますが、カタビロオサムシ類は、りっぱなはねを持ち、飛ぶことができます。地上だけでなく木の上でも見ることができ、ガの幼虫などを食べます。

ヤマサナエ



4月～8月。体長は63～69mm。サナエトンボ類で、この仲間としては大型です。

低山地などの流れのある水域(すいいき=水のある場所)にすんでいます。

台湾ウチワヤンマ



初夏～秋、体長は70～81mm。大型。ヤンマの名がつき、大きいですが、サナエトンボのなかまです。

すんでいる地域が、以前は四国南部、九州、南西諸島でしたが、最近では地域が広がり、ならやまでもときどき見られます。

ヒメアカネ



6月～12月、体長は28～38mm。日本産の赤とんぼ(アカネ属のトンボ)の中では、最も小さいものです。

可愛(かわい)らしいトンボですが、ならやまでは多くありません。



「絶滅危惧種」とは、ある一つの種類(しゅるい)の生き物が、この地球上から完全にいなくなってしまうことです。100年以内(いない)ぐらいに絶滅してしまうおそれがある生き物を「絶滅危惧種(ぜつめつぎくしゅ)」といいます。絶滅してしまった生き物にはもう二度とあうことはできないのです。

キイトトンボ



初夏～秋、体長は35～46mm。イトトンボのなかまで、同じなかまの中では中型です。平地や丘陵地、低山地の水草のよく茂った池や沼にいます。名前はオスの体の色が黄色いからですが、メスは黒ずんだ黄色です。

ヒナカマキリ



8月～11月、体長は15mm 前後。きわめて小さいカマキリムシです。はねは退化(たいか)してほぼなくなっています。見つかることもまれ(希)です。(写真は幼虫) 奈良県では希少種(P10で説明)に指定されています。

ベニイトトンボ



初夏～秋、体長は36～43mm。平地や丘陵地の樹木に囲まれた、水草のよく茂った池や沼にいます。名前のお通り、体の色が朱赤色をした中型の美しいイトトンボで、キイトトンボの仲間です。メスはオスのように赤くはなく、くすんだ赤っぽい色です。赤が目立つので、すぐ見つけることができます。

すむ場所は限られていて、奈良県では希少種に指定されています。

トビナナフシ



6月～11月、体長は40～50mm。雑木林(ぞうきばやし)で見られます。カマキリに近い昆虫で、擬態(ぎたい=体をいろいろなものに似せること)で有名なナナフシ類のなかまです。エダナナフシやナナフシモドキは飛ばませんが、トビナナフシは飛ぶことができます。



「レッドデータブック」、絶滅(ぜつめつ)した生き物や、絶滅のおそれがある生き物の情報(じょうほう)をまとめた本です。世界の生き物はIUCN=国際自然保護連合(こくさいしぜんほごれんごう)が、日本の生き物は環境省(かんきょうしょう)が中心になって、調査(ちょうさ)して作っています。